

成田国際空港残土置場整備 埋蔵文化財調査報告書

—成田市十余三四本木Ⅱ遺跡(2)—

平成30年12月

成田国際空港株式会社
公益財団法人 千葉県教育振興財団

成田国際空港残土置場整備 埋蔵文化財調査報告書

—なりた　とよみ　しほんぎ　—
—成田市十余三四本木Ⅱ遺跡(2)—



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第778集として、成田国際空港株式会社による成田国際空港残土置場整備事業に伴って実施した成田市十余三四本木II遺跡(2)の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

十余三四本木II遺跡(2)の調査では、縄文時代早期の遺物包含層が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘調査から整理作業まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成30年12月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 平林秀介

凡　例

- 1 本書は、成田国際空港株式会社による成田国際空港残土置場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県成田市十余三四本木73-17ほかに所在する十余三四本木Ⅱ遺跡（遺跡コード211-062）の調査成果である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、成田国際空港株式会社の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財團が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の期間、担当者などについては第1章に記載した。
- 5 本書の執筆及び編集は、主任上席文化財主事 城田義友が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、成田国際空港株式会社および成田市教育委員会の御指導、御協力を得た。また、出土土器の時期については、西川博孝氏の御教示を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
第2図 成田市役所発行 1/2,500地形図「09KF721・09KF723」（電子版）
第3図 柏書房発行 「明治前期関東平野地誌図集成」「成田」 1/25,000
第4図 国土地理院発行 1/25,000地形図「成田」（電子版）
- 8 使用した遺跡周辺航空写真は、図版1上が極東米軍撮影（昭和22年）、図版1下が国土交通省撮影（昭和54年）のものである。
- 9 本書で使用した座標は、日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第IX系）で、図面の方針はすべて座標北であるが、報告書抄録中の遺跡の経度・緯度については、世界測地系への変換値を示した。
- 10 挿図に使用したスクリーントーン等の用例は、図中に示した。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の経緯と方法.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査の方法と概要.....	1
第2節 遺跡の位置と環境.....	3
1 周辺の地形と遺跡の位置.....	3
2 周辺の遺跡.....	5
3 基本層序.....	5
第2章 遺構及び出土遺物.....	7
第1節 調査の概要.....	7
第2節 遺物包含層と出土遺物.....	9
1 早期の遺物.....	9
2 後期の遺物.....	9
第3章 まとめ.....	11
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 グリッドの呼称例.....	1
第2図 十余三四本木Ⅱ遺跡事業範囲.....	2
第3図 周辺の旧地形.....	3
第4図 周辺の地形と遺跡.....	4
第5図 基本層序.....	5
第6図 微地形と調査対象範囲.....	7
第7図 調査区全体図.....	8
第8図 包含層遺物出土状況.....	10
第9図 包含層出土遺物.....	11

図版目次

図版1 遺跡周辺航空写真(昭和22・54年撮影)	図版4 包含層遺物出土状況、土層断面(1G~4G)
図版2 調査前風景、調査風景	図版5 包含層出土遺物
図版3 包含層遺物出土状況	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

成田国際空港株式会社は、成田市内において、成田国際空港B滑走路北側残土置場整備を計画した。実施に当たり、平成30年3月15日付け成整土第2025号で、千葉県教育委員会に対して事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて照会した結果、同3月22日付け教文第170号の37で、予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である十余三四本木II遺跡の範囲内に所在する旨回答があった。千葉県教育委員会は、成田国際空港株式会社とその取扱いについて慎重に協議した結果、地山の掘削を伴う浸透池・沈砂池部分について記録保存の措置を講ずることとし、それ以外の範囲は調査対象から除外された。そこで、公益財團法人千葉県教育振興財團は、成田国際空港株式会社と発掘調査の実施について調整を行い、残土置場整備に伴う埋蔵文化財調査として、平成30年度内に発掘調査及び整理作業を実施した。

それぞれの業務の期間、業務体制と担当者は以下のとおりである。

発掘調査

期間 平成30年7月4日～平成30年7月31日

面積 調査対象 510m²/上層確認 510m²/下層確認 24m²

調査体制 文化財センター長 島立 桂

調査第一課長 蜂屋孝之

担当職員 上席文化財主事 麻生正信

整理作業

期間 平成30年10月1日～平成30年10月31日

作業内容 水洗・注記～報告書刊行

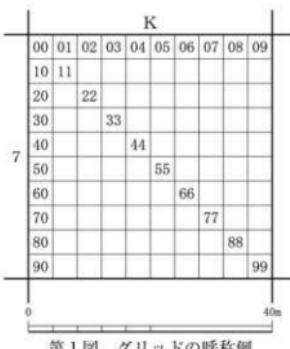
業務体制 文化財センター長 島立 桂

整理課長 田島 新

担当職員 主任上席文化財主事 城田義友

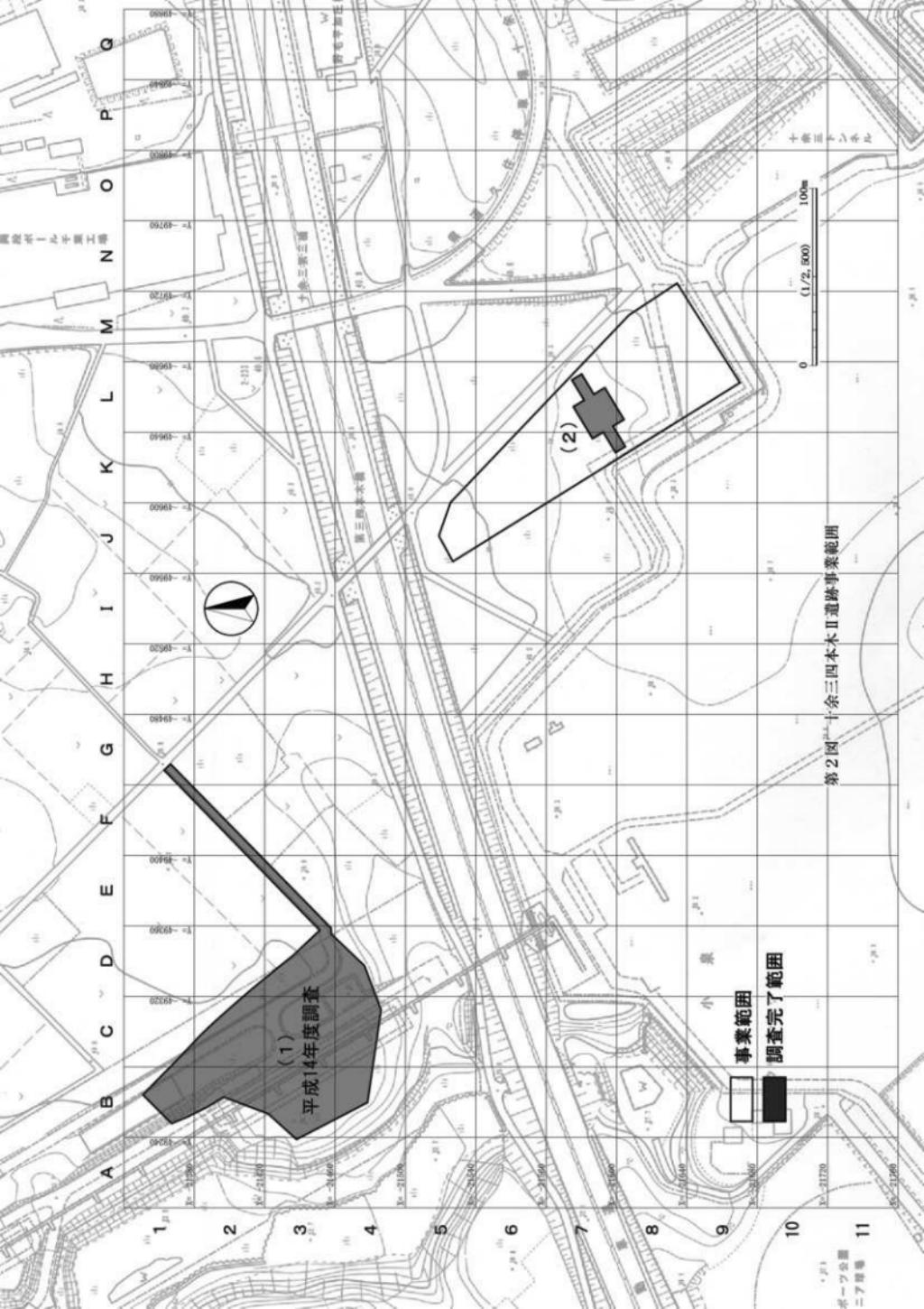
2 調査の方法と概要（第1図・第2図）

発掘調査に当たり、対象遺跡に公共座標（日本測地系に基づく国家標準直角座標系）を基準とした方眼網を設定する。方眼は40m×40mの区画を大グリッドとし、さらにその大グリッド内を4m×4mの小グリッドに分割した。つまり、大グリッドは東西10×南北10の100個の小グリッドで構成されることとなる。大グリッドは西から東へA、B、C…、北から南へ1、2、3…と記号番号を振り、これを併せて大グリッドの名称とした。一方、小グリッドは北西隅を00とし、東へ01、02、03…、南へ10、20、30…と番号を付けることとしたため、大グリッド内の南東隅の小グリッドが99となる（第1図）。これを、例え



第1図 グリッドの呼称例

第2図 十余三四本木II道路事業範囲



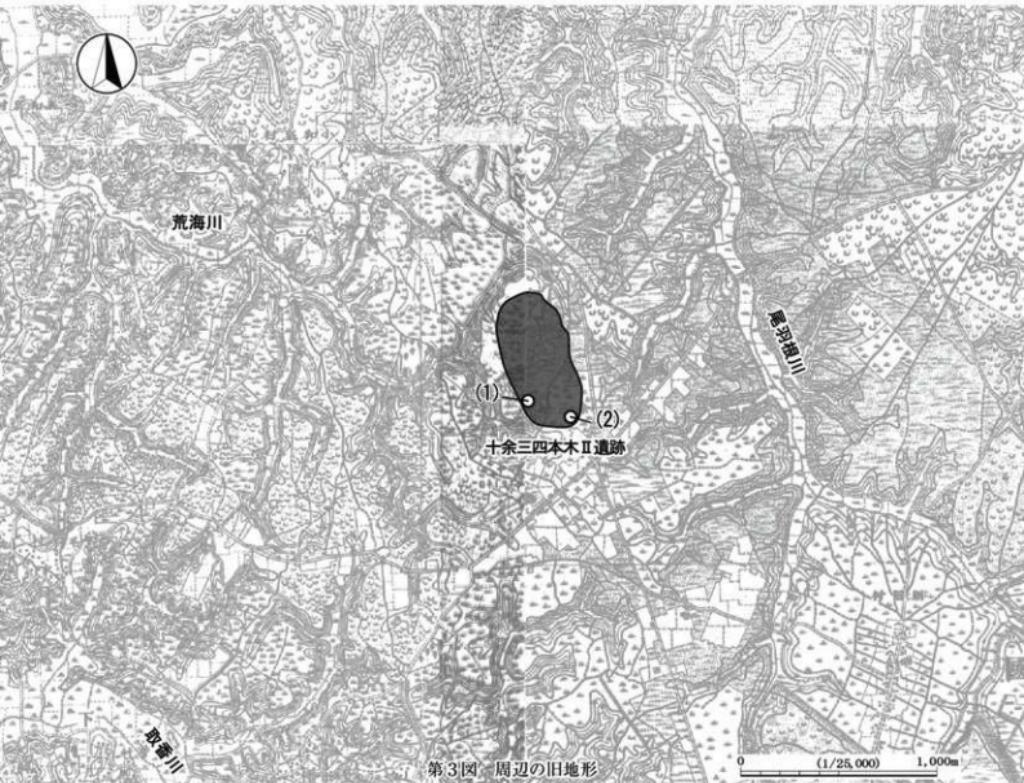
ば「7K-99」のように大グリッドの名称と組み合わせて表記することとした。なお、今回の調査対象遺跡は、平成14年度に近隣地点が調査されていたため、今回はその際の方眼網を活用した（第2図）。

今回の調査対象範囲内に位置する8L-00グリッドは、日本測地系座標でX = -21,560.000、Y = -49,640.000、世界測地系変換値では、X = -21,204.4989、Y = -49,932.8284、北緯35度48分27秒、東経139度16分50秒である。

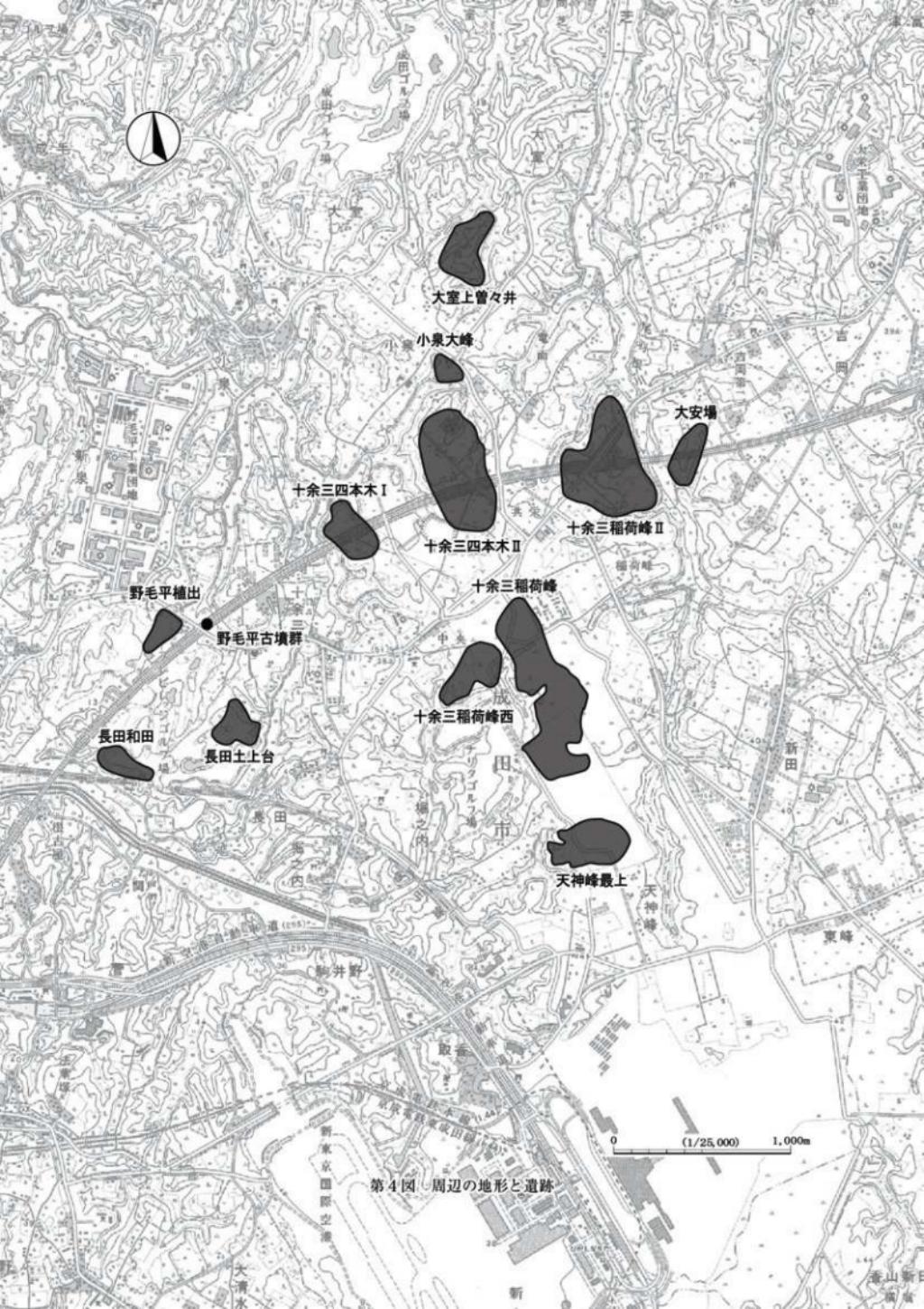
第2節 遺跡の位置と環境

1 周辺の地形と遺跡の位置（第3図・第4図）

千葉県北部を特徴づける「北総台地」と呼ばれる低く平坦で広大な洪積台地は、中小河川に浸食された樹枝状の谷により開析され、複雑な地形を呈している。本遺跡は、そのような北総台地の中央付近に位置し、尾羽根川上流域左岸から西に切れ込む支流と、北西に進んで根本名川に合流する荒海川上流域の南に切れ込む支流とに挟まれた台地上に位置する。遺跡周辺の現標高は38m～40mで、周囲の水田面との比高差はおよそ20mである。今回の調査範囲は、成田国際空港B滑走路の北側で、東関東自動車道（成田地区）の南側にそれぞれ隣接し、航空無線施設用地として平成14年度に調査された十余三四木本II遺跡（1）が、東関東自動車道を挟んだ北西約250mの位置にあたる。



第3図 周辺の旧地形



第4図 周辺の地形と遺跡

2 周辺の遺跡（第4図）

平成14年度の調査では、旧石器時代～縄文時代移行期の石器、縄文時代の陥穴と土坑、縄文時代早期の包含層が検出された。今回の調査では、遺構は検出されなかったが、前回と同様に縄文時代早期の包含層が確認された。本遺跡周辺の縄文時代遺跡は、早期・前期の土器を伴うものが多い。

当遺跡西側にあたる荒海川水系では、十余三四本木I遺跡¹⁾を挙げることができる。調査区西側の斜面にかかる部分から、まとまった量の早期撫糸文系土器を中心に前期の織維土器が出土した。また、荒海川水系と当遺跡の南西側に当たる取香川水系との間の台地上にある野毛平古墳群²⁾でも遺構外から撫糸文系土器が出土し、野毛平古墳群に隣接する野毛平植出遺跡³⁾では田戸下層式土器が、長田土上台遺跡⁴⁾で前期黒浜式期・関山式期の集落が確認された。調査例はないが、当遺跡の北側に連なる台地上の小泉大峰遺跡・大室上曾ヶ井遺跡でも、早期の土器が確認されている。当遺跡の東側にあたる尾羽根川水系では、尾羽根川本流左岸の十余三稲荷峰II遺跡⁵⁾で、縄文時代の竪穴住居16軒が散在し、早期条痕文期～前期黒浜式期の土器が出土したが、いずれも流れ込みと考えられ、遺構の時期は不明である。また、南側から侵入する小支谷の谷頭付近に早期沈線文系～前期黒浜式期を含む包含層が検出された。なお、尾羽根川本流右岸の大安場遺跡でも早期条痕文系の包含層が確認されている。一方、当遺跡の南側は、成田国際空港本体の建設に伴って多くの遺跡が調査されている。その中で、十余三稲荷峰遺跡⁶⁾では三戸式を中心とした沈線文系土器と条痕文系土器を伴う多数の竪穴住居が検出され、その西隣の十余三稲荷峰西遺跡⁷⁾で沈線文系土器を伴う包含層、南側に位置する天神峰最上遺跡⁸⁾で撫糸文系土器を中心とする包含層が検出された。

3 基本層序（第5図）

今回の調査では下層の遺物は出土しなかったが、基本層序について記しておく。

III層 ソフトローム層

IV層 ハードローム層。赤色粒子を含み、全体的に赤みを帯びる。

V層 第1黒色帶。下層のA Tの拡散により、全体的にやや白みを帯びる。

VI層 A T層

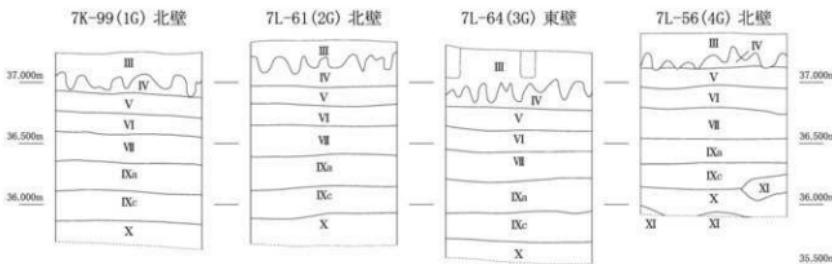
VII層 第2黒色帶上部。A Tの拡散によりやや白みを帯びる。

IX a層 第2黒色帶下半部（上）。径10mm程の黄色粒子を多く含む。

IX c層 第2黒色帶下半部（下）。黒色・緑色粒子を含む。

X層 立川ローム最下層

XI層 武藏野ローム層



第5図 基本層序

注

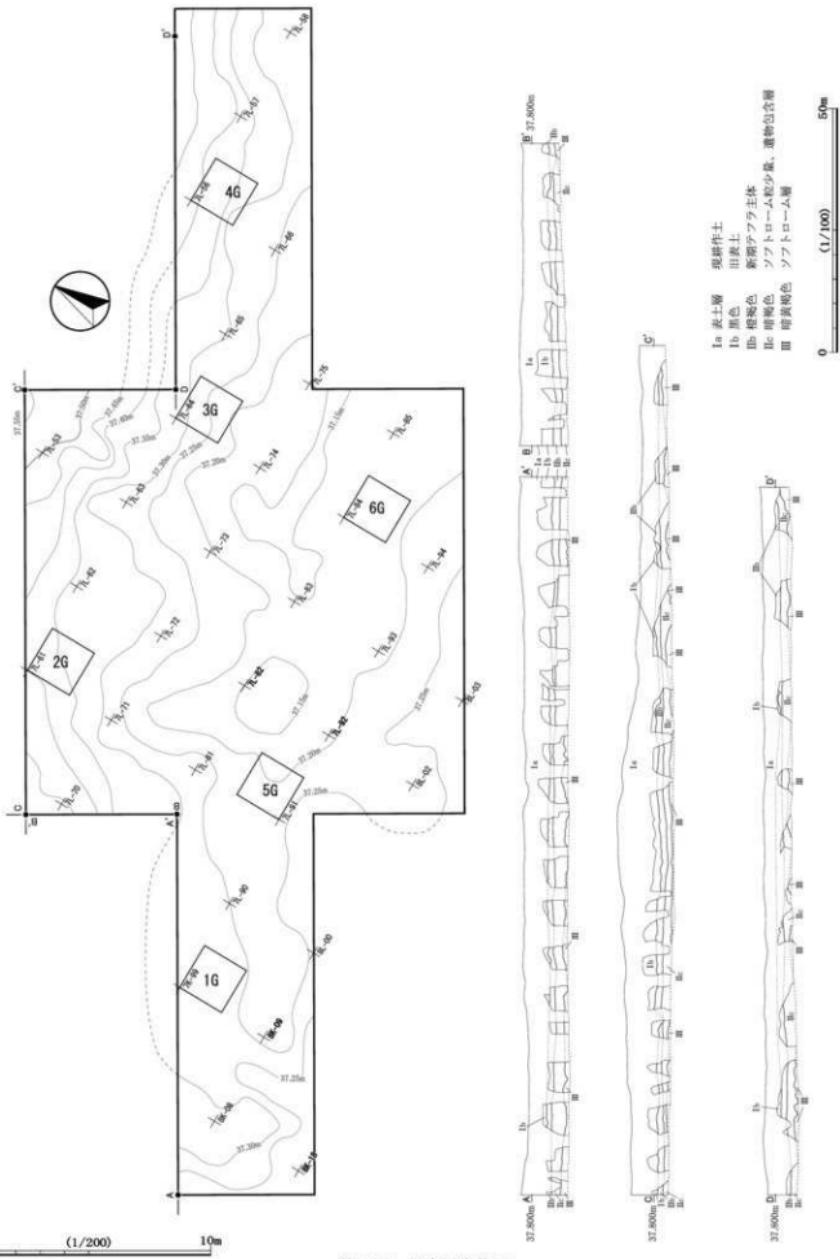
- 1 財團法人千葉縣文化財センター 1985 「四本木遺跡（No.5）」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書 I - 成田地区 -』
- 2 財團法人千葉縣文化財センター 1985 「野毛平古墳群（No.3）」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書 I - 成田地区 -』
- 3 財團法人印旛都市文化財センター 1990 「野毛平植出遺跡」『千葉縣成田市野毛平木戸下遺跡・野毛平向山遺跡・野毛平植出遺跡・野毛平千田ヶ入遺跡・長田舟久保遺跡・長田土上台遺跡 ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）』
- 4 財團法人印旛都市文化財センター 1990 「長田土上台遺跡」『千葉縣成田市野毛平木戸下遺跡・野毛平向山遺跡・野毛平植出遺跡・野毛平千田ヶ入遺跡・長田舟久保遺跡・長田土上台遺跡 ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅲ）』
- 5 財團法人千葉縣文化財センター 1985 「稲荷峰遺跡（No.6）」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書 I - 成田地区 -』
- 6 財團法人千葉縣教育振興財團 2006 「成田國際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XXII - 十余三稲荷峰遺跡（空港No.67遺跡）-（繩文時代以降編）』
- 7 財團法人千葉縣文化財センター 2000 「新東京國際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIII 十余三稲荷峰西遺跡（空港No.68遺跡）』
- 8 財團法人千葉縣文化財センター 2001 「新東京國際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XV 天神峰最上遺跡」

第2章 遺構及び出土遺物

第1節 調査の概要（第6図・第7図）

調査区は、残土置場中央に設けられる沈砂池及び浸透池用地部分であり、西側から入る浅い支谷の谷頭下付近に設定されている。このため、調査区全体の表土を除去しつつ、通常の遺構の検出と併せ、遺物包含層の存在を想定した調査を行った。遺構は検出されなかったが、II c 層内で縄文時代早期の土器がやまとまって出土したため当該期の遺物包含層と判断し、精査及び出土遺物の記録を行った。上層の調査終了後、 $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ の下層確認グリッドを6か所設定し、ソフトローム層上面から立川ローム層下面まで精査したが遺物は出土せず、下層については確認調査で終了した。





第7図 調査区全体図

第2節 遺物包含層と出土遺物（第8・9図）

1 早期の遺物

調査区西側の7K-99グリッドを中心とした範囲から、少量ながら、早期の良好な資料が出土した。出土層位はⅡc層中であるが、近年の深耕により縞状に擾乱されているためか、Ⅱc層の中位～Ⅲ層上面から出土しており、早期の遺物の中での傾向は把握できない。ただ、遺物の包含密度は薄いが、当該期の遺物包含層が調査範囲外に広がることは確実である。

1～9は、三戸式の深鉢である。胴部から口縁部まで、急角度ではほぼ直線的に立ち上がり、口唇部はわずかに内削ぎ状で、明瞭な平坦面を有する。外面には、硬い動物骨などの丸い棒状工具により描いた太くシャープで密な横方向の沈線を全面にめぐらせるものである。1の口唇部には胴部を施文した工具とは異なる細板状の工具等による直交方向の浅い押捺が施されている。胎土は緻密で纖維を少量含み、焼成は良好である。口縁部破片については、いずれも胴部の破片と胎土、文様が酷似するものの、3は口唇部の幅が異なるうえ、2・3の口唇部には押捺状の施文がみられないことから、複数個体が混在している可能性も考えられる。

10は、茅山式の胴部下半と考えられる深鉢の破片である。内面外面ともに条痕を施すが、外面は縦方向、内面は横方向である。胎土はやや粗く、纖維を含み、焼成は良好である。

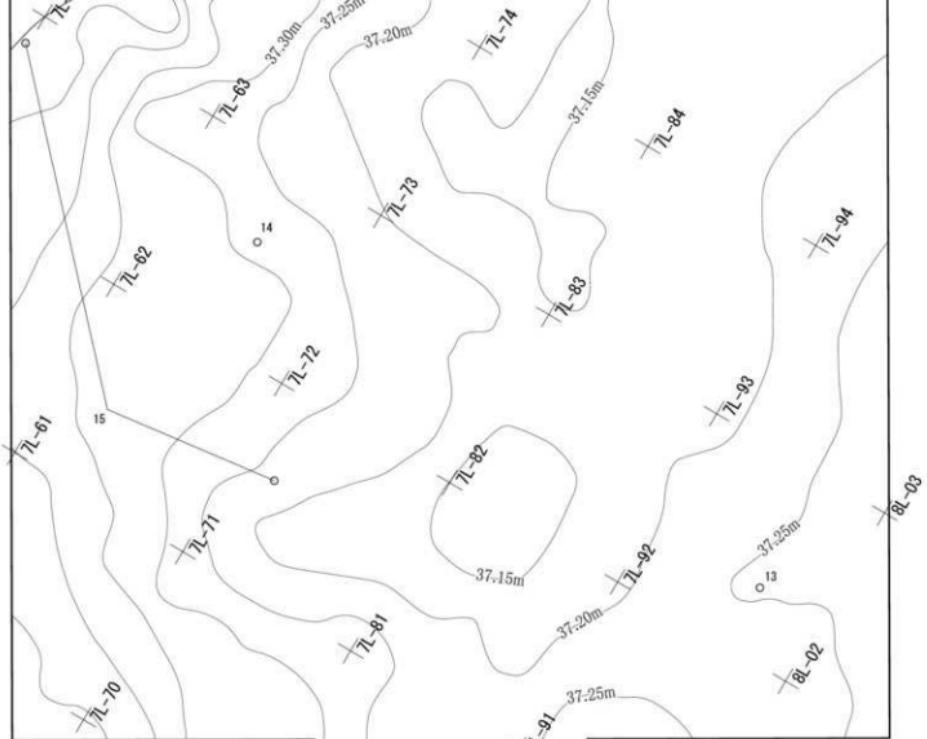
11・12は鶴ガ島台式と考えられる深鉢の破片である。小片であるためはっきりしないが、内面には横方向の条痕が施され、外面には竹管など細い棒状工具による刺突と斜め方向の沈線、押し引きなどが施されている。胎土は細かい砂粒を多量に含むが、纖維はそれほど多くない。焼成は良好であるが、比較的風化が進んでいる。図示したもののほか、同時期と考えられる圓化困難な小破片が、近傍のグリッドから4点出土した。

2 後期の遺物

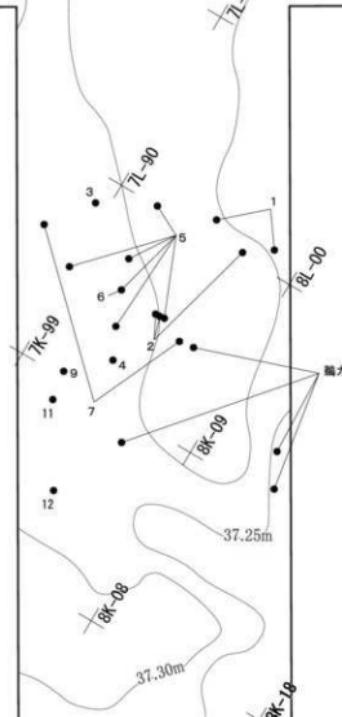
早期の遺物が集中する箇所とは異なり、調査区中央付近の広い範囲から散発的に出土した。出土層位はいずれもⅡc層中であるが、やや上位から出土する傾向が認められる。調査区外の平坦部分に存在すると考えられる遺構からの流れ込みの可能性が高い。

13～15は、後期加曾利B式と考えられる破片である。なお、今回の調査で出土した後期の土器はすべて図示した。

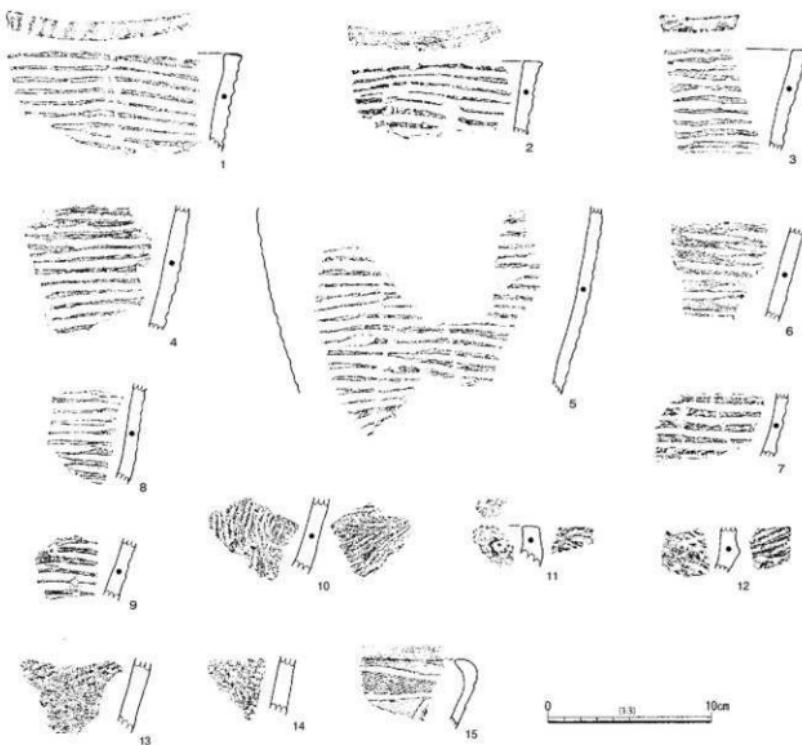
13は深鉢の中位以下の胴部破片で、やや細かい縞文が横方向に施文される。内面はなめらかで、ナデもしくはミガキにより調整されているものと考えられるが、摩耗しておりはっきりしない。胎土は砂粒を非常に多く含み、焼成は比較的良好である。14は底部に近い部分の深鉢の胴部破片で、外面には縞文が横方向に施文され、内面は丁寧なミガキにより調整される。焼成は非常に良好である。15は、浅鉢の口縁部破片である。体部は浅く立ち上がり、口縁部は内湾状となる。外面には丸棒状工具による浅い沈線で上下を区画された縞文帯が横方向にめぐり、文様部分以外は丁寧なミガキにより調整される。胎土は緻密で、焼成は良好である。



0 (1/100) 50m



第8図 包含層遺物出土状況



第9図 包含層出土遺物

第3章 まとめ

前回の調査でも三戸式を中心とした早期沈線文系土器が多く出土し、本遺跡の南側には十余三稲荷峰、十余三稲荷峰西といった当該期の集落が確認されていることから、本遺跡がその時期の集落域の一角をなすことが指摘されている^⑩が、前回の調査では、今回確認されなかった撚糸文系土器の井草式や夏島式、沈線文系土器の田戸下層式も出土している。また、前回の調査では確認されていない後期の土器も出土しており、時期ごとに利用域が変遷している様子が窺える。いずれにしてもこれまでの調査では、ほとんど遺構が検出されていないことから、具体的な本遺跡の様相については今後の調査をまつほかあるまい。

注) 財団法人千葉県文化財センター 2002『成田市十余三四本木II遺跡 - 航空無線用地内埋蔵文化財調査報告書』

写 真 図 版





調査前風景（南東から）



調査風景（南西から）



包含層遺物出土状況(南西から)



包含層遺物出土状況(南から)



包含層遺物出土状況(北東から)



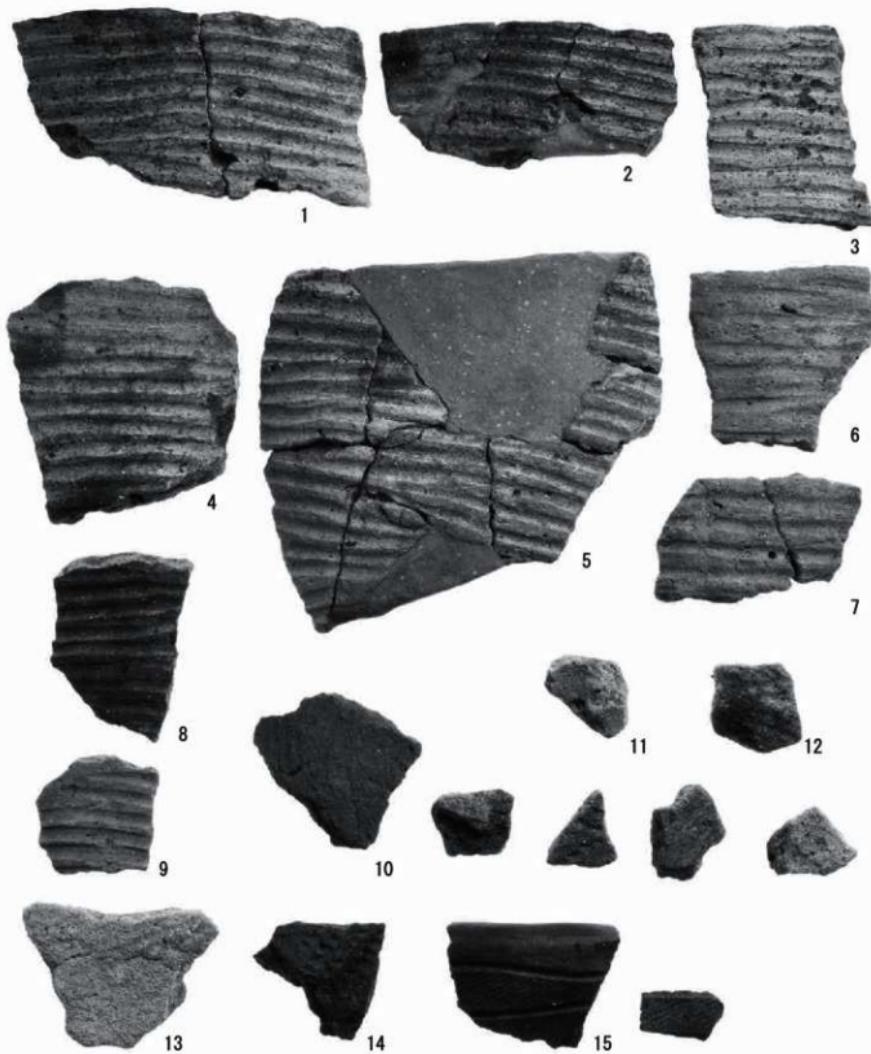
1 G (7K-99) 土層断面(南から)

2 G (7L-61) 土層断面(南から)



3 G (7L-64) 土層断面(南から)

4 G (7L-56) 土層断面(南から)



包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	なりたこくさいくうこうざんどおきばせいひまいぞうぶんかざいちょうきはうこくしょ 成田国際空港残土置場整備埋蔵文化財調査報告書							
副書名	成田市十余三四本木II遺跡(2)							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育振興財團調査報告							
シリーズ番号	第778集							
編著者名	城田義友							
編集機関	公益財團法人 千葉県教育振興財團							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL.043(424)4848							
発行年月日	西暦2018年12月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号							
十余三四本木 II	千葉県成田市十余三四 本木73-17ほか	12211	062	35度 48分 27秒 (世界測地系)	139度 16分 50秒	20180704 ~ 20180731	510m ²	成田国際空港残 土置場整備に伴 う埋蔵文化財調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
十余三四本木 II	包藏地	縄文時代	遺物包含層 1か所	縄文土器 (早期・後期)	包含層から比較的 良好な早期三戸 式の土器が出土し た。			
要約	今回の調査区は、西側から侵入する地形図上では確認することが困難な複数の小支谷の谷頭付近にあたり、その部分に堆積したII c層中より縄文時代早期の遺物包含層が確認された。当該遺物包含層は調査区域外に広がることは確実である。また、早期遺物包含層より東側の谷頭の肩付近から、散発的ながら後期加曾利B式土器が出土しており、台地平坦部分に当該期の遺構が存在する可能性がある。							

千葉県教育振興財團調査報告第778集

成田国際空港残土置場整備埋蔵文化財調査報告書

—成田市十余三四本木II遺跡(2)—

平成30年12月15日発行

編集 公益財團法人 千葉県教育振興財團

発行 成田国際空港株式会社

成田国際空港内

(成田市古込字古込1-1)

公益財團法人 千葉県教育振興財團
四街道市鹿渡809番地の2

印刷 株式会社 正文社

千葉市中央区都町1-10-6